

第7課 「罪に打ち勝つ」

*信仰によって義とされ、イエスの十字架による贖いによって救いの約束がなされた者は、その人生の歩みの中にイエスを反影する。私たちの生活は、イエスの模範に照らされて吟味されなければならない。イエスと出会い、その愛に触れ、感謝と感動、喜びを感じ、憧れを持ち、その生き方に大いなる価値を見出した者は、イエスの模範に積極的に従いたいと願う。イエスに倣い従う時に、私たちはイエスに似た者と自然に変えられてゆく。聖化はイエス・キリストへの信仰に伴うものである。

1. 罪が見せる様々な顔

- **罪から抜け出すのは困難**：罪があるから善が存在するという二元論的な考え方は聖書は認めていない。パウロは「恵みが増すように罪の中にとどまるべきか」(ローマ6:1)とあえて問う。そして「決してそうではない」(ローマ6:2)と否定をしている。悪にふけると、実際には、ますます深みにはまり込み抜け出せなくなってしまい、善を行なう事が困難となってしまう。
- **バプテスマを例として**：バプテスマは死と復活を意味している。水に沈められる時(埋葬、水葬)私たちは罪人としての生き方を放棄する決心をする。つまり罪の支配の下にあった過去の私は死ぬのである。そして、水から上がる事を通して、イエスによる復活が示されている。本来、死は一度きりのものである。キリスト者は二度と罪の支配の下にあってはならない(しかし、自分の力ではどうしようもないのが事実である)。イエスの歩まれた人生を歩む私たちが一番心にとめなければならないのは、イエスは常に父なる神に依存していた(全的に委ねていた)という事である。委ねつつ罪の誘惑と闘った。力は神から与えられる。委ね、求める事でイエスと共に悪に立ち向かい、勝利の約束を確信して信仰によって求め続ける(ローマ6:2~11)。
- **意志を働かせる時**：罪はまるで王様のように私を支配しようとする。それに対抗し阻止する為に、罪の誘惑に対して、正しく積極的に意志を働かせる。ただ、自分の努力や意志の力で救いを得るのではない事を自覚する事は必要だ。意志とは「決断力」「選択する力」であり、何を選ぶかが問われてくる。私たちが神に仕える事、献身する事、全てを委ねる事によって、神が私たちのために働くことができるように整えられるのである。罪や欲望との戦いには闘い方がある。自分の知恵や力では闘えない事を認めなければならない。そして、神が私に代わって闘って下さる事を感謝して受け入れる必要がある。信仰によってイエスの勝利と、信じるものに対して認められる義の力が与えられる(ローマ6:12)。
- **正しい律法の理解**：ユダヤ人たちは、神の律法を擁護する為に、それを守る為に、あらゆる規則や規定を設けた。しかし、やがてその規則や規定は、神の律法よりも優先されていった。それによって、いつの間にか人々は、律法の本質を見失い、やがて神を見失うに至った。神抜きの変な信仰に支配されてしまう。サタンは善いものも悪いものによってねじ曲げてしまう。このような「律法主義」という罪、守ることのできない(守り通す力がない)律法を強いる「律法主義」の内に身を置くのではなく、罪に勝利し、律法を全うされたイエスと繋がる者となれたら幸いである。神の深い恵みによって、イエスを信じる者には全ての罪の誘惑から守られ、悪に対抗する力と知恵、確信に満ちた強い信仰が、イエスによって私の内に実現される(ローマ6:14)。
- **罪を退ける**：神の恵みの下にある者は、律法に示されている本質的なものが身についてゆく。心に律法が刻まれる。すなわち律法を行なう事が自然にできるように神は私たちに導かれる。イエスを救い主と信じ受け入れる事によって、イエスによって義とされる事によって、バプテスマによって、滅びゆく罪人の定めから救われた罪人となる事によって、罪を退けることができる。

2. 神の僕か、罪の奴隷か

- **二人の主人**：私たちは罪人であるが故に、何者かに支配される必要のある奴隷である。本当の自由が回復される時(再臨)まで支配されてゆく。奴隷にとって、どんな主人に仕えるかは重大な問題である。それによって人生が全く変わってしまう。しかも、どっち付かずの状態ではいられない。善か悪か、神かサタンか、どちらかに身を置くのである(神の側にはない場合はサタンの側にある)。神の僕には義が施される。しかし、罪の奴隷に至るのは死である。一見、自由であるかのように放任と甘やかしがなされるが、次の瞬間、裏切り、失望、不安のどん底、滅びへと向かう。どうにか楽な状態になりたいのだが(放任や甘やかし)それはまやかしなので楽にはならない。しかし、なおも求め続けてしまい、不幸の中に息絶える。未来の希望(復活と永遠の命、完全なる平和など)も失ってしまう。今からでも遅くはない。善い主人の下に仕えたい(ローマ6:16)。
- **罪からの救い**：私たちは罪の世に生まれ育ち、悪の傾向を生まれつき持っている故に、罪の状態に慣らされて、義に対して麻痺している。このまま放っておけば、何の実りもなく死、滅び、存在が無くなる。まるで自殺行為、そして生きる意味を見失う。罪とはまさに不治の病のようなもので、奇跡的な癒しが必要である。そんな奇跡的な事を私たちのために実現して下さるのが、救い主であり、私たちの創り主である神なのである。罪の世にあって神の保護の下、私たちは罪に仕える事はない。しかし、リスクが無くなった訳ではない。常に誘惑にさらされている。倒れてしまうこともあるだろう。でも神は、こんなに弱い私たちであるにも関わらず、なおも信頼し立ち返るのを待っていて下さる。私たちは、罪を犯すという事は、神に対する裏切りであり、その心を深く傷つけ悲しませてしまうのだという事を覚えておきたい(ローマ6:19~23)。